年頃まではやつたと云う。保土ケ谷在では「稲荷こ、万年こ、お稲荷さんのお初、お初の段から落ちて、赤いちんこすりむいた。こうやくを買うんだからこうやく代をおくれ」とうたい、金をくれると「大尽、大尽、大大尽」とはやし、くれないと「けちんぼう、けえちんぼ、びんぼうのけえちんぼ」とけちをつけた（黒田昌旻採集）という。又保土が谷では「お稲荷さんのお初、おじゆにとおあげ、あげておくれよこん〳〵さんがなくよ」とうたい、金をもらうと「大尽や大尽や、金蔵たてろ」とうたい、くれないと「貧乏や貧乏やいもぐら立てろ」とうたつた（丹羽好夫採集）と云う。子安では「稲荷講、万年講、お稲荷さんのお初、ごじんつにおあげ、おあげの段からおつこつて、赤いちん〳〵すりむいて、こうやく代をおくれ、おおくれ、おくれ、くれないうちは動かんぞ、あげておくれよこん〳〵さんがなくよ」（岡村保治採集）とうたい、中村町では男の子が今戸焼の狐を持つて近所の家をまわり「いなりこ、万年こ、おはつの段からおつこつて、赤くお尻をすりむいて、こうやく代をおくれ、おうくれ〳〵、一文でも二文でもごかつて次第、しだいの餅は、いいとことつて、食うとこねえ、あげておくれよ、こん〳〵さんがなくよ、何とつてなくよ、こん〳〵てなくよ」とうたい、金をくれると「だいじん〳〵」と云い、くれないと「びーんぼ〳〵」とはやしたてた（矢沼昭喜採集）そうだ。

横浜方面から三浦半島の中部頃まで大体同じ様な風習が行われていたことがわかる。大正頃までは各所で盛に行われていた様だが金銭強要の悪習打破と云う風教上から次第に禁止されたものらしく、現存するものは極めて少い様である。三浦半島南部にも同じものが行われていたかどうかはつきりしないが、久里浜――葉山をつなぐ線以南からは「稲荷講万年講」のうたが採集されて来なかつた。初声町ではやらなかつたと山田国蔵老は云つている。三崎町で全く形の異う稲荷講が現存するのは、三浦半島中部以北と全く異う稲荷講の形が行われていたからであろう。

手まり唄採集

塚田明治

横須賀市東浦賀町新井の山下ナヲさんから昔の手まり唄を聞いた。山下さんは明治二十年生である。

○　通りいつちよの真中で、文を一本拾つて、その文の上書は小僧さん女房になるとつて、とんがらしの仲人ついて御殿やはやして、御殿や御殿女中の居りいす居まあす、の下でまりをすとんとついたらば、まりはおやどへとびやんす、花はちり〳〵ちりやんす、おさんどうの、おさんど

うのお猿さん、赤いおべべが大おすき、すすやちやぶちやぶ〳〵、ゆうべえびすこでよばれていつたら、鯛の汲物小鯛の焼もの、一つばいおすすれすすれ、二はいおすすれすすれ、三ばい目には魚がないとて、奴のすすはきとんぱた〳〵、おくさまおかえり殿様おかえり、からすの行水羽がぱた〳〵、まず〳〵一貫かし申した。せんそうまんそう。

○ おらがせどのむつやの木、六つで鐘をつきそめて、七つでおこまへまへらして、おこまのお堂で日が暮れて、今晩お宿はどことらしよ、宿はせまし、夜は長し、一年たつてもまだ来ない、二年たつてもまだ来ない、三年目正月でひいふうみい四五六七八九、十から下つたお芋やさん、お芋は一升いくらです、お前の事ならまけてやろ、ざるお出し、頭を切られたとうの芋、しつぽを切られた八つ頭。

○ とん〳〵となりの魚屋さん、お魚ずくしのお正月、まつ黒まぐろの御紋付、仙台ひらめのおはかまで、いかにも立派なだんなぶり、ほう〳〵小だいのおすいもの……以下不明

○ ほゝほけきよやうぐいすや、梅の小枝でひるねして、ぢや〳〵ぶの木の下で、たたみ三じよう酒三升、高いとこのたけのこ、低いとこのひきがえる、海の中の小魚

○ 鎌倉へ詣る道に椿うえて育てて、日が照れば雀どおこに、雨が降れば雨宿り、雨宿じや降りに宿りて、新茶いや〳〵甘茶いや〳〵、それでお方へ目がついた、目がついたらだいておおやり、おこばこまあくらに、おこばこじや髪がこわれる、お前のおん手をまあくらに、殿様のまあくおら元に、きつねこんこと鳴いたとて……以下不明

風邪に関する民間療法

赤橋尚太郎

鎌倉市由比ヶ浜の国宝一鳥居傍に畠山六郎重保墓と伝える大きい石造宝篋印塔がある。墓畔に茶を竹筒に入れて奉納する習慣がある。場所は重保邸跡と伝え、彼がかぜをひき咳に苦しんでいた時討手をうけたので咳のため充分戦えず非業の死をとげたと伝え、風邪をひいた時、咳の出る時には竹筒に茶を入れて「六郎様」に奉納するとなおると信ぜられているのである。竹筒に茶を入れて奉納し、咳の出るのをなおしてもらうと云う信仰は同じ鎌倉市二階堂の永福寺跡にある姥石にもある。三浦郡葉山町上山口の間門には路傍に風化した凝灰岩塊を切石で囲んだほこらがあり、